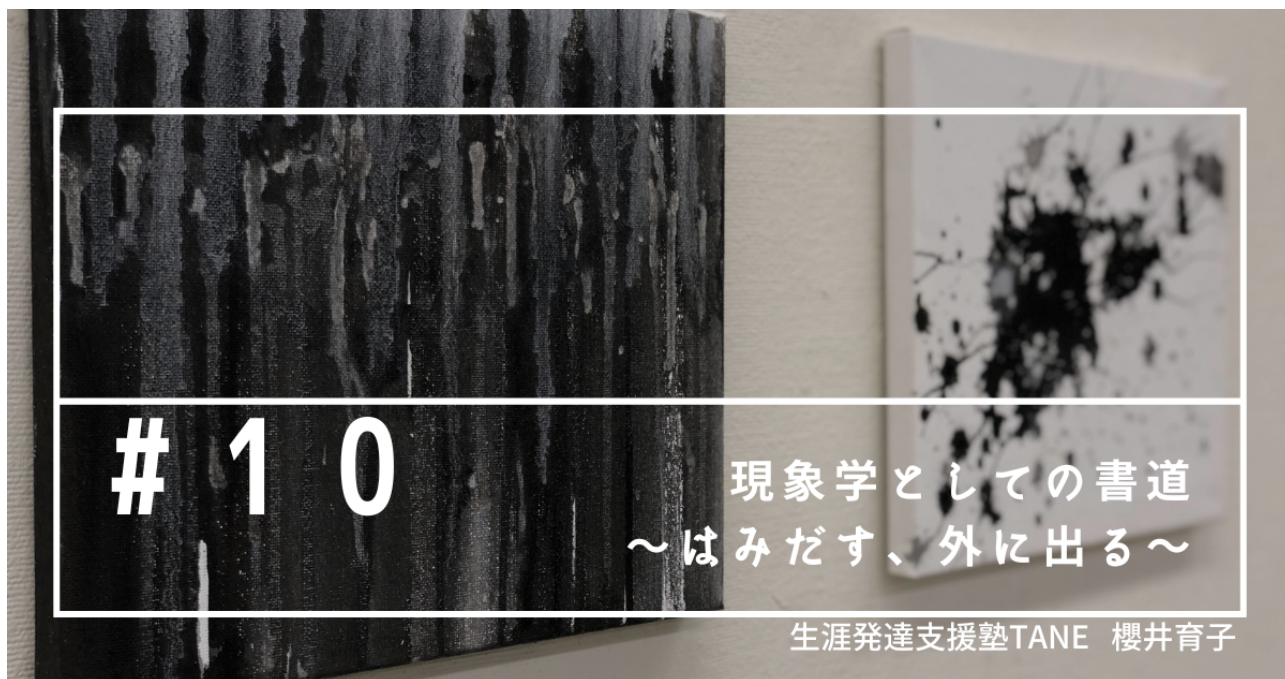




はじめに

現在、書道という分野についての研究は文字や技術の分野であることが多く、対人援助に絡めた分野では芸術療法などの一部として取り上げられる程度である。「すみあそび™」はわたしがこれまで様々な場で取り組んできた書道を用いたワークショップだが、8年もやっているとそれなりにたくさんの事例が集まってきて、それなりにたくさんのことが「見えて」くるようになった。これまで「単なる遊び」「のびのびとやっているワーク」「自由に楽しそう」というものではあったが、ここでまとめて行くことで気がつくこともあり、ついに2025年より、「はみだすラボ」というオンラインサークルを立ち上げ、分野横断の大人の学びの場を豊かにしていく取り組みを中心活動にしていける覚悟ができた。今回は、立ち上げの経緯と今後の展開についてまとめておく。

時代はとっくに変化していた

宮城県はだいぶ前から不登校児童生徒数は最多であり、これは「震災の影響」などと言っていたが、本当はもっと前から多かったし、そもそも何か特別なことが影響してきたわけではない。「不登校の数」などというものの、統計上の問題でしかなく、わたしの友人の子などは、「学校は週2回くらいでいいかな」と言って、図書館の本とタブレット、好きな本を作るなどしながら学年以上のことを学んでいる。もちろんフリーランスの家庭なので両親が在宅しているため、本人たちにとっては何も「問題」ではない。が、結果その子は年間30日欠席などはとっくに超えてしまっているために、学校での取り扱いが「不登校児童」となっている。これはもちろん減多にならないタイプの「好事例」ではある。しかし、時代が変化し、職業観、生活様式、何もかもが変化しているにも関わらず、なぜか「毎日学校に通う」というスタイルについてはアップデートされない。にも関わらず、文科省は「予測不可能な時代に対応できる柔軟かつ多様性を尊重する人間を育てる」みたいなことを言うのだが、柔軟さ、多様性尊重、予測不可能なことを受け入れ、挑戦し解決する能力のある大人がどれだけいるんだろう。

不愉快という感情体験が枠を変えていく

はみだすことについて深く考えるようになったのは、書道という道筋からはだいぶはみだした「すみあそび」というワークショップを開催し、そこに通う大人たちが「自分の道」について考え始める、という現象が起こり始めてからである。お手本もなく、ひたすらに自分の好きなこと

を書き続けていいという「すみあそび」の時間は、自分自身の凝り固まっていた「枠」を外すトレーニングである。中には、「全然思い浮かばない、お手本がないとダメ」「あたまが堅いから」「子どもはいいわね」などの言葉を吐きながら書く方もいる。「楽しいとは思えない」という言葉も当然いただいた（そういう方々は大体なぜか怒っている）。しかし、その「ちょっと不愉快な体験」「自由は難しい」と、わざわざこんな体験をする、というそのものに価値があるのではないか、と覚えることも増えた。大事なのは、とにかく「自分自身がどう覚えるか」というところだけにフォーカスする、ということだ。そのちょっとした「怒り」すら、「あなただけの大事な感情ですね」と伝え続けてきた。すると、人は和らぐ。「つまらないことをつまらないと感じていてもいいのだ」ということ、これは真理であり、ここを大切にするかしないか、は「自分軸」で覚えているか否か、ということでもある。

「最近、なんだか我慢するのが難しくなってきた」という方もいた。自分自身の感情に気がつき、いかに我慢していたか気づく。「好きなように生きていいのかもしれない」。その人自身が枠を外していくと、それを見続けてきた周りの人たちも楽になる。こんな方々が教育現場にいたらいい、いやむしろ、自分を生きる「フリーランス教育者」が街に溢れたらいい。

自分軸が育つから、はみだせる。はみだすから、自分がOKになる。

「自分を大事にしましょう」という言葉を言うのは簡単だ。ところが「ではどう動けばいいのかが分からない」「自分の思った通りにしましょう」（それってわがままじゃないの？）「自分の好きなことをしましょう」（それって正解はなんなの？）と心の声が聞こえるときには、それは「心の声」ではなく「誰かの声」、つまり他者の評価を気にするあまり出てきている言葉である。「はみだしても安心できる」という安心感を持つ大人が増えれば、当然ながら「自分軸」で生きる大人が子どもたちをそのまま受け入れることができる。ところが、自分で自分に「OK」という体験そのものを、味わう機会が少ない。そこで有効なことが「言語化」で、「はみだすラボ」ではオンラインのすみあそびでは必ず自分自身の作品を言語化して具体的に褒めていく。言葉を出していくうちに、言葉の肌触りのようなものが変化したり、作品そのものへの視点が変わったりする。

「すみあそび™」で大事にしているポイントは、まさに不確実な時代への手がかりである。

①枠を外す／肯定感と価値観を知る ②失敗する／許せないことを知る ③まずやってみる／行動と計画性を知る ④違う方向から見てみる／柔軟性を知る ⑤夢中になる／集中力と影響力を知る ⑥感情を表す／エネルギーと情動を知る

これらの実践を感覚（無意識）として体験し続けることが、実際の自分自身の領域を拡げ、まさに枠からはみだすことへの安心感が生まれる。この実践と理論を両面から味わい、自分自身も実践者として教育分野あるいは対人援助の場面で生かすことのできる、アートプレイワーカー™についても講座準備中。まずは大人が領域を拡張し分野横断で学び続ける「はみだすラボ」へぜひ参加していただけたら幸いである。



はみだすラボ申し込みフォーム



SHU_KOU_IKUKO

朱 紅 育 子 shukou icco（生涯発達支援塾TANE、書と生き方研究所代表）

宮城県在住、1979年生まれ。水瓶座。書家・美術家。認知発達の視点からアートと生き方を統合する

「朱紅・書と生き方研究所」運営。既存の枠を外し続ける「フリーランス教育者」のオンラインサークル「はみだすラボ」を現在拡張中。全国すみあそびProject実施中。